Pick UP! Company

高級ホテルや博物館などの塗装に採用

光栄プロテックが誇る「硫化いぶし仕上げ」

意匠性が高く、高級感のある金属塗装や表面処理で定評のある大阪府枚方市の株式会社光栄プロテック。高級ホテルや博物館の内外装などにその技術が採用され、存在感を示しています。

1953（昭和28）年に石川県から上京し、建築金物メーカーの下請けで職人として働いていた現会長の道下正治氏が1962（昭和37）年、大阪府豊中市に拠点を移して塗装業を個人創業。1976（昭和51）年に枚方市に本社工場を建設して、現在につながる基盤を固めてきました。

そんな同社を象徴する特殊技術のひとつが「硫化いぶし仕上げ」です。これは、硫化剤を塗布して表面に酸化被膜を作って着色する表面塗装技術。味わい深く、高級感のある茶褐色の落ち着いた色彩を表現できますが、従来は真鍮などの銅合金にしか施せませんでした。しかし、建築素材としてスチールやアルミなどの金属が増えるなか、同社では「何とか、それらの金属に硫化いぶし仕上げを施せないか」と試行錯誤を重ね、乾式工法による独自の方法によって、それを実現させました。

京都市にある「ホテル ザ セレスティン京都祇園」のエレベーターの扉や京都国立博物館の内装壁、名古屋市にある名古屋商科大学の出入り口の枠や扉などに、この硫化いぶし仕上げが採用されており、落ち着いた雰囲気を演出しています。

同社ではこうした特殊塗装の専用工場として、本社工場隣接地に「RI工場」を今年新設。硫化いぶし仕上げなどの作業をこの専用工場に移すことで、増えている需要に対応していく考えだといいます。

硫化いぶし仕上げのほかにも、銅が長年の風雨にさらされて変化する天然緑青を再現した「本緑青仕上げ」、表面を鏡のように磨き上げて光沢をもたせる「ピアノ調塗装」など、さまざまな塗装・処理技術を有する同社。その技術力の高さは「大阪ものづくり優良企業賞2015」、「関西ものづくり新撰2016」などに選定されたことでも証明されています。

道下氏の後を継いで2008年から代表取締役社長を務める三田雅憲氏は「人材こそが当社の宝。その宝を大切に育てて技術を引き継ぎ、次の代につないでいきたい」と話しています。

扉などに硫化いぶし仕上げが施されている「ホテル ザ セレスティン京都祇園」のエレベーター。

硫化いぶし仕上げなどの専用工場として建設されたRI工場の内部。

名古屋商科大学では出入り口の枠や扉に硫化いぶし仕上げが施されている。

京都国立博物館では内装壁とルーバー金物が硫化いぶし仕上げになっている。